

Leader

白鷗大学・学長

奥島 孝康

Interviewer

進研アドBetween編集長

長田雅子

大局観と行動力を持った
学生が世界に巣立つ
若き情熱の学府でありたい

早稲田大学総長として8年にわたり改革を推進した奥島孝康氏。白鷗大学の学長として、リベラルアーツ教育を行う大学づくりをめざす考えだ。実践したい教育のあり方、育てたい学生像、改革を進めるうえで必要論について聞いた。

プルス・ウルトラの精神で改革を推進

長田 学長に着任されて半年がたちました。就任までの経緯と今のお気持ちを聞かせてください。

奥島学長(以下奥島) 早稲田大学の総長を退任した後、大学には携わらないと心に決めていました。ここ10年間は高校野球やボーイスカウトなど、青少年の育成に携わってきましたが、森山眞弓前学長の意向を受け、さらに長く親交のあった理事長からも要請をいただき、お引き受けしました。

引き受けた以上はできる限りのことをする覚悟です。本学には上岡一嘉初代学長が打ち出された「プルス・ウルトラ」というモットーがあります。「さらに向こうへ」という意味で、大学のあり方そのものを象徴する素晴らしい言葉だと思います。このモットーに従い、大学を前進させていくのが私の使命であると考えています。

長田 どのような方向に改革を進めていくお考えでしょうか。

奥島 本学は教育・経営・法の3学部からなる中規模大学です。さらに、小山市という地方都市への立地、これまでの歴史などをふまえると、早稲田大学のように大学院に重心を移そうとする大学ではなく、英米のカレッジのような存在をめざすべきだと考えています。具体的にはリベラルアーツの追求です。

本学には地方の大学らしく、家族的でのびのびとした雰囲気があり、素直な学生が多い。大学経営は安定し、教員の皆さんは明るい顔で教育・研究に取り組んでいます。ただし、学生の多くは栃木県出身で県内に残る卒業生

が多く、内向きの姿勢が見られることが気にかかります。これからの時代は、県内のみならず、国内各地や海外へ出て活躍できる人材の育成が急務であり、その方策の一つがリベラルアーツです。

リベラルアーツで「良き市民」を育成

長田 白鷗大学におけるリベラルアーツとは、どのようなものでしょうか。

奥島 日本の大学教育の問題の一つは、カリキュラムのあり方や教員の意識が、あたかも学者を育てるかのような方向にあることです。現実には、ほとんどの学生が大学卒業後に社会に出ていきます。そうである以上、どのような状況にあっても対応できる力を育てることが大切です。つまり、アメリカのコミュニティー・カレッジのように、専門教育並みに教養教育を充実させ、人格、教養ともにバランスのとれた「良き市民」を育てることが、本学のめざすリベラルアーツです。

リベラルアーツの目標は、次の2つに収められます。一つは大局観を養うこと、もう一つは行動力を身に付けること。法律や経営などの狭い学問の中に閉じこもるのではなく、世の中全体を幅広く見渡せる大局観を養い、自ら未知の分野に飛び込むことができる行動力を身に付ける。そのうえで、専門性を深めたい学生は本学のみならず全国の大学院をめざすという形をつくっていきたくと考えています。

長田 具体的にどのような方策をお考えでしょうか。

奥島 一つには学部間の垣根を低くして、3学部が共同で教育にあたる体制

をつくることです。私は早稲田大学の総長時代に、リベラルアーツの充実を図るために「テーマカレッジ」というゼミ形式の科目を立ち上げました。特定のテーマを追究する学際的な科目で、学部を超えて教員・学生が集まり、アートや環境などさまざまなテーマの学習や研究に取り組むのです。バーチャルな学部・学科がいくつも生まれるというイメージです。

本学においては、3学部の教員が学部の垣根を越えて協力し合い、独自のカリキュラムを構築することによって、学内にバーチャル・ファカルティがいくつも生まれ、いずれ、主専攻、副専攻といった形で専門の履修に生かせる、ということを考えています。

もう一つは、英語による授業の充実です。一般教養科目は「パンキョウ」などと呼ばれ、学生は自分の生き方や大学での学びとは関係ないものと思がちです。今考えているのは教養科目を英語で行うことです。学生には海外でも通用するという自信が生まれ、それが行動力を引き出すはずで、今後10年ほどかけて、英語で授業ができる教員を増やし、ゆくゆくは全ての教養科目を英語で学べる環境を整えたいと考えています。基礎固めにしっかりと取り組むつもりです。

学生にはスポーツにも取り組んでほしいものです。私はずっと文武両道の大切さを説いてきました。知性と野性を培う教育が理想だからです。

平和を欲するのであれば戦いに備えよ

長田 森山前学長は国際交流を推進され、奥島学長も早稲田大学でアジア地



おくしま・たかやす 1939年生まれ、愛媛県出身。早稲田大学大学院法学研究科博士課程修了。早稲田大学教授、法学部長、教務部長などを経て1994年総長に就任。2002年に総長を退き、日本高等学校野球連盟会長、ボーイスカウト日本連盟理事長、富士山クラブ理事長などを兼務。2013年から現職。専門はコーポレートガバナンスなど。法学博士。

域との交流や研究にご尽力なさいました。今後、進めていきたい国際交流について聞かせてください。

奥島 現在、本学で行われている留学は、夏休みの語学研修など短期のものがほとんどです。今後は交換留学に力を入れ、毎年100人ほどの留学生を受け入れ、送り出す体制をつくりたいと考えています。日本の文化や歴史について教員が英語で教え、日本人学生と留学生が、それぞれの考えを英語で語り合うような教育ができれば、学内の雰囲気はがらりと変わるでしょう。

グローバル社会では語学や異文化理解も大切ですが、何よりも重要なのは日本人としてのアイデンティティーを確立することです。一部のエリートは、まるで自分が日本人ではないかのように、日本の悪口を言うことがあります。

これからは、自国の良いところを掘り起こし、国際社会に積極的に発信していくような社会をつくっていくべきではないでしょうか。外国人と日本の文化や歴史について話すことが、日本人としてのアイデンティティーを確立するきっかけになるはずです。

長田 奥島先生にとって大学改革の要諦とはどのようなものなのでしょうか。

奥島 私の好きな古代ローマ人の言葉があります。「平和を欲するのであれば、戦いに備えよ」です。大学改革も同じで、よい大学をつくらうとするなら、大学の経営が順調なときに、十分な準備と体制づくりを進めなければなりません。大学が立ち行かなくなつてからでは遅いのです。建学の理念にあるように、白鷗大学が真に「若き情熱の学府」であろうとするならば、プルス・ウルトラの精神を発揮して、常時、着実に改革を続けていくことが求められるはずです。

ただし、うまくいっているときに改革の芽を探すのは簡単ではありません。まずは、誰も異論がないところに光を当て、改革の突破口を開いていくことが大切です。早稲田大学でも初めの3年間は何も動きませんでした。最初はゆっくりと方向性を見極め、改革を進めるうちに新たな課題が出てきたら、その機を逃さず先へ先へと進めていく。絶えず前進していくための方向性を見定めることが、学長としてなすべき仕事だと思っています。